

題字 大島文雄先生



本年度総会で記念講演をしていただく中井精一先生が監修された、県内ではすでに皆様おなじみの「富山県方言番付」（上）と先生の編著書『南大東島の人と自然』（下右）です。講演の詳細は本紙8頁をごらんください。

富山の深層粹 —『蛸洲餘珠』との邂逅—

富山大学人文学部長 磯部祐子

迷ったときには 福岡大学人文学部教授 甲斐勝二（28回中国文学）

ふるさとの山 伊藤克江（37回日本史学）

研究室から／日本文学

縄文人の思いに触れて 朝田亜紀子（44回考古学）

研究室から／日本語学

朝乃山に学ぶ「鍛錬」の大切さ 船木悠平（61回哲学）

平成28年度総会、人文の集い報告

人文学部のあゆみ 第2回 富山大学准教授 入江幸二

卒業祝賀会報告・新刊案内

総会、第6回人文の集い開催案内

富山大学同窓会連合会十周年記念事業の案内 他



富山大学人文学部同窓会

〒930-8555 富山市五福3190

電話：(076) 445-6143

FAX：(076) 445-6141

E-mail：
alumni@hmt.u-toyama.ac.jp

富山の深層粹

—『蛸洲餘珠』との邂逅—

富山大学人文学部長 磯部 祐子



何かを調べていると思いがけないことに出会うことがある。

かつて、台湾から出版された『日本漢文小説叢刊』をめくっていた時だった。「越中蛸洲翁戯著『困譚』」と題された一書が目に入った。その書は文政甲申（一八二四）に京都で出版されたもので、中国語で記された解説には、「作者は不詳」と記されている。

「越中」は、我が富山に違いないと思いき、調べると、その人は紛れもなく江戸期に生きた高岡文壇のリーダー寺崎蛸洲のこ

全国に知られた時代に、自らもその地の人であることに因んで付けた号と思われる。

江戸末期の津島北溪『高岡詩話』は、蛸洲について、京都の漢学者皆川淇園に学び、寛政から文政にかけて高岡詩壇の代表として数種の書を刊行していたと記す。

そのうち『困譚』は漢文笑話集。小咄を漢文化したものを中心に四十一話が収められ、江戸の笑いが展開されている。なるほど、「軽快洒脱、人と談ずるや戯謔百出、人をして捧腹絶倒せしむ」（『高岡史料』）人ならではの作品だ。

また『蛸洲餘珠』は物語性に富む散文集。果人による散文集の嚆矢である。漢文に対する深い造詣によって見事に脚色されたその書には、上下合わせて四十二話が収められる。その魅力は、正確で格調高く、中国古典の知識に裏打ちされた表現にあ

る。

一方、内容は、富山県内の始祖伝説・歴史秘話・笑い話から江戸をはじめ京都九州の興味深い出来事、ひいてはギリシア・ロードス島の巨像のことまで多岐にわたり、作者が、洋の東西を問わず、珍しい情報に極めて敏感であったことを窺わせる。

また、虚構性に富むものも多い。たとえば、上巻第六話「生き別れた夫婦、討ち入りの日に再会を果たす」（原題・宇賀京輔）は、生き別れた夫婦が、風

『和蘭通舶』『徳楽嶋巨銅人之図』所載の「七奇図（世界七不思議）」に類する。異国の不思議な話への強い関心から書かれたのであろう。

表現に眼を転じてみれば、到る所に彫琢が加えられている。「不思議な事だと思っている」と、ひとりの美人が、葵の花の提灯を手を持って出てきた。長い袖に垂れた髪、その姿は艶やかで美しく、世に並ぶ者がないほどであった」という内容は、

「方に懷惑の間、一位の美人、手に葵花燈を提げて出づ。蟬袖垂髻、風流秀曼、曠世にして其の麗なきなり。」（上巻第十三話「風流な貴人、洒落た趣向で客の肝をためす」原題・某貴紳）とある。ここで用いられている

「蟬袖垂髻、風流秀曼」の四字語は、当時の鎖国日本にあまり齎されなかった清の小説『聊齋志異』の句。聊齋のことばを各処に用い、修辭へのこだわりを窺わせる。

それゆえか、前掲『高岡史料』は、「其詩文歌句には、才花英発、咳唾皆珠を成すの觀あり。然れども、其詩文は、喜んで艱險の字句、奇異の典故を用ふるの癖あり」と記す。

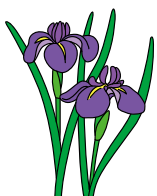
しかし、情報入手が容易な今日、「艱險の字句」も、本人の原意を求めることができる。こうして、偶然に出会った蛸洲作品を紹介することができた。

『江戸の笑い―漢文で熟した富山の文化―』桂書房、『富山文学の黎明 1 漢文小説『蛸洲餘珠』（巻上）を読む』、『富山文学の黎明 2 漢文小説『蛸洲餘珠』（巻下）を読む』桂書房の都合三冊である。

富山大学に身を置く者として、富山の優れた漢文学を顕彰できたことは嬉しい。更なるこの地の深層粹との邂逅に心が弾む。

学部長を拝命して、富山と人文学部への思いが弥増さる。人文学が目的とする人間と人間社会の知の解明を学生の教育を通じて一層進めたい。

それにつけても、同窓生各位の、人文学部と後輩に対する温かく厳しいご叱咤を切にお願いする次第である。



迷ったときには

福岡大学人文学部教授 甲斐勝二(28回中国文学)



した。

しかしながら、時代の変化で大学も高校のような教育型へと移行が進み、予算の確保からも学生が卒業後の社会活動で使える能力や技能教育の充実も避けられなくなっています。

したがって、私の現在の仕事の課題は研究力を養成しながら同時に社会からの要請に応えるためにはどうするか、ということです。実はこれは従来演習などで行われていて「なにをいまさら」なのですが、現代学生氣質に合うように、互いに意見を交わし、協働によって成果を上げるグループワーク型授業も始めています。学生たちの議論には私も考えさせられることがあります。

一つ例を挙げましょう。

私たちが全学共通教育で行っているグループ学習型授業のまとめで昨年度のような課題を出しました。「病気の治療薬としては認められているが、一般には流通していない集中力を高め

る薬を薬剤師からもらった受験生が、この薬を飲んで受験すれば他の受験生とフェアではなく、飲まなければ受験に失敗するかも知れないと悩んでいる。

この受験生はこの薬を飲むべきか否か、理由を示して述べよ。

グループの間を回りながら話を聞いてみると、「受験は人生を決めるのでここで失敗はできない、しかも合法の薬なのだから飲んでよい」という意見が多かったようです。何かの判断をする場合我々はしばしばそれぞれの結果のプラス・マイナスを比較して考えます。今回は「大合格」の方にプラス事項が多かったのでしょう。

様子を見てみると類似の発想が多かったため、私は「飲む」方向で話を進めていたある班に「君にとってどちらの選択が美しいか考えたか」と別の視点を提示してみました。すると即座に「飲まない方が美しい」と応えたのは人文学部の学生です。以後その班は「飲まない」方向で話が進み、全体発表のときには「悩むなら薬は飲まずに自分で合格できるところへ行くのが本人のため」という結論になっ

ていました。ただし「僕なら悩まずに飲むけどね」というつぶやきもありました。共同開講者の哲学の先生から「情緒的な判断をうながした」とからかわれましたが、功利的な論断の多い中で「飲まない方が美しい」と反応した学生がいた事にはいささかほっとしました。

「受験で人生が決まる」とは思いませんが、将来大きな差異が予想される時、二つを効果のプラス・マイナスの利益表にして比較するのは当然でしょう。こんな場合しばしば注目される要素が経済的利益です。政策決定の裏付けとしてよく聞きますよね。「カジノ許可は経済効果を上げる」とか、「武器の輸出解禁は経済効果が高い」など各主張の論拠に使われます。

経済と欲望の解放(生活のための最小限の欲望である食欲の充実すら金がなくては難しい時代です)は対応するように思われてなりません。経済が向上し、収入が増せば、これまで適わなかった願望も実現できそうです。説得力が高まってその主張の支持者も増えるでしょう。しかし、そんなときでもそれが「美しい」行為か否か、この視

点も判断基準に入れてほしいとつねづね願っています。

確かに、情緒的な判断は危険です。煽動にも利用されかねません。しかし、行為の選択の場合「それは自分にとって美しいか否か」を判断基準に入れる事、これもその人の選択では、特に迷った時には、有効な方法だと考えています。というのは「美しい」という感覚はその人を作る「良心」或いは「理想」というものと大きな関係があるはずだからです。

私たちは目の前に起る様々な事象に日々対応していかなければなりません。今日の事柄の処理で精一杯です。けれども多くの人には「こんな人でいたい」というのは「こうありたい」というぼんやりした思いがあるのではないのでしょうか。ある行為を選ぶ時はそれが「美しい」と思われるのはその思いに沿うからでしょう。我々の「人文」や「文学」という学問は、詰まるところこのあたりのことを考えてきたように思っています。皆さんは迷ったときにはどうされていますか。

(福岡市在住)

文理学部文学科を卒業して三十八年、今年還暦です。卒業後富山に行く機会は少なく、富山時代に出会った方々は多くが学生時代の頃の容姿で脳裏に現れます。当時から先生や友人など環境に恵まれ、振り返ればまさに「おかげさまで…」です。

今私は九州の私大に勤務しています。富山大学では、大学は研究力の養成の中で、具体的に言えば「従来あるものから従来にない何かを見つけ出したり生み出したりする力」が育ち、「そこに面白さ」を感じたり、「社会改善」を提唱できるようになる人材が育つ所だと学びま

いんねつとくえい

伊藤 克 江 (37回日本史学)



金沢から東京に向かう新幹線の車窓から、立山が見える。富山を離れて十数年になるが、立山の雄大な姿を見るたび、富山での学生生活が懐かしく思い出される。

筆者は現在、石川県白山市(旧鶴来町)に鎮座する白山比咩神社で、学芸員として勤務している。

当社には白山を御神体山として仰ぐ、全国三千余社の白山神社の総本宮である。また、国宝の剣銘「吉光」や白山三社神像などの重要文化財一〇点を所蔵し、県指定文化財となつてゐる白山比咩神社文書の中世文書は、中世における加賀国を研究

する上で重要な史料である。これらの文化財は随時宝物館で公開しているが、学芸員としての主務は神社史の編纂にかかる調査・研究である。

神社史の編纂は、平成二十年に当社の御鎮座二千年の記念事業として計画され、これまで『図説白山信仰』、『白山信仰史年表』、『改訂増補図説白山信仰』、そして一昨年に通史編の一冊目となる『白山比咩神社史古代・中世篇』を発刊した。当社の神社史は、本社の歴史だけでなく、全国に広がる白山信仰の在り方を、文献、考古、民俗、芸能など多様な分野から調査・研究を進めている。

平成二十九年の本年、白山は開山一三〇〇年を迎える。越前の僧泰澄が養老元年(七二七)に白山に登拝してより、白山信仰は時代と共に全国的な広がりを見せている。古来、白山に登拝する道を禪定道と言ひ、加賀・越前・美濃の禪定道があり、それぞれの禪定道には拠点となる

馬場の存在が当社所蔵の『白山之記』に記されている。加賀馬場は現在の白山比咩神社(石川県白山市)、越前馬場は現在の平泉寺白山神社(福井県勝山市)、美濃馬場は現在の長滝白山神社(岐阜県郡上市)である。白山開山一三〇〇年を記念して、三馬場が連携し様々な祭典・行事が予定されている。

白山に源を発し、伏流水となつて大地を潤す水は生命の源であり、現在においても「水の祖神様」として人々に篤く信仰されている。白山のなだらかな稜線は、立山に比べると女性的である。開山を記念する本年、ふるさとの山を改めて仰ぎ見る機会になるよう、発信できればと考えている。



白山遠景

研究室

から

日本文学

東アジア言語文化コース教授

呉羽 長

本誌第三十六号(平成二十六年十月発行)で、同年六月の二村文入先生ご逝去のことをお知らせしましたが、その後日本文学分野では、二十七年三月に山口幸祐先生が定年退職され、同年四月に小谷瑛輔先生を近・現代文学担当准教授として迎えまし

た。(写真前列中央、呉羽の隣の方です。)これにより、現在田村俊介先生(中世・近世文学担当)、小谷先生、及び呉羽(平安文学担当)の三教員体制で授業を含めた分野の運営を行っています。

小谷先生は、現在三十七歳、人懐こい人柄で、芥川龍之介を始めとする作家作品に関する精緻な読みを行つて業績を重ねる一方、学生の多様な作品への取り組みに応じながら、懇切・熱心な指導をされています。富山ゆかりの作家をめぐる講座の講師など学外での貢献も多岐にわたっています。小谷先生の着任で四年次の卒業研究では、近・現代の作品を扱う学生が多くなりました。研究室に活力を吹き込みつつ、新しい良き伝統を作つて下さることを思います。



平成二十九年度の在籍学生は、大学院二年生一名、学部四年生十九名、三年生二十名、二年生十三名、計五十三名という構成になります。それぞれの時々の課題と取り組みながら、切磋しつつ研鑽を積んでいます。近年卒業後の就職も好調で、今春の卒業生も、中・高等学校、市役所、金融・流通関係の企業などに活躍の場を得、勇躍して旅立ちました。

この四月、これまで日本語学・日本文学二分野が同居していた日本言語文化学生演習室は、総勢八十人を超して手狭であつたこともあり、日本文学一分野で使用するこ

にになりました。日本語学は北隣の旧フランス言語文化演習室などの二室に移りました。これにより、日本語学ともども、演習・講読の授業のほか、授業の準備や卒業研究等の学習活動にもゆとりができ、良好な環境により学習や研究に良い成果があげられるものと思います。日本語学の教員・学生の皆さんとは、共に日本語文化を究める分野でもあり、引き続き交流を密にして行きたいと考えています。

なお、呉羽は今年度末に定年となります。平成十七年の移籍以来、恵まれた環境の中で古典文学研究を通して学生の皆さんと親しく語り合いができたことに大きな幸せを感じております。

縄文人の思いに触れて

朝田 亜紀子 (44回考古学)

「これは、大変なことになった…」足の踏み場もない位の密度で出土した、一面の縄文土器。谷底にはぎつしりと厚く折り重なっていて、よく見ると、土器の合間から骨や石器、漆で美しく彩色された木器が顔を出しています。平成十六年に発掘調査をおこなった、氷見市上久津呂中屋遺跡の思い出です。

私は平成八年から二十八年まで、(公財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所、富山県内の発掘調査に携わりました。業務を通じて、縄文時代から江戸時代まで様々な時代の集落や墓などを調査する機会に恵まれました。その中で特に印象深かったのが、能越自動車道建設に先立ち発掘調査をおこなった、氷見市上久津呂中屋遺跡です。

「あたり一面の縄文土器」は考古学に携わる者にとっては宝の山に等しく、垂涎の的です。しかし業務の一環であり、工期が迫っていることを考えると、

一体どれだけの作業量になるのか非常に悩ましく、真夏の炎天下、氷見の小丘陵の麓で、呆然と縄文土器が埋まる谷を見おろしました。それからまもなくして、遺物を傷つけないよう慎重に掘削を進める傍ら、出土状況の記録やデータを地道に取り続ける日々が始まりました。我々にこのような大変な作業を強いた厚さ三メートルにも及ぶ堆積物は、縄文時代早期末から後期にかけて、三千年にわたり縄文人によって捨てられ続けたゴミでした。

ゴミといっても、現代の私たちの感覚とは全く違います。この堆積物中からは、人骨も、狩猟の大切なパートナーであった犬の骨も出土しているからです。単なる不要物であるはずがありません。縄文人は身の周りにあるものから様々な道具を作り出しましたが、土器、木器、石器、骨角器と呼ばれるそれらには、作り出された時点で魂が宿るとされました。おそらく八百万の

神に近い信仰が あったのではないかと想像されます。道具は大切に使われ、一部が壊れても別の用途に転用されました。そしていよいよ道具が役割を終える時には「モノ送りの儀式」をおこない、道具に宿った魂を天に送り返しました。縄文人は、人間や動物のみならず、道具についても別れの儀式をしていたのです。この儀式は特別な場所、聖域で行われましたが、それが先述の上久津呂中屋遺跡の谷であり、各地で見つかっている貝塚であったのだと思います。

現在、上久津呂中屋遺跡は能越自動車道の下に埋まっており、出土遺物は富山県埋蔵文化財センターに保管されています。縄文時代の遺跡を掘りながら、物への接し方を考えさせられ、自らの姿を省みた夏でした。



上久津呂中屋遺跡出土縄文土器(「とやま発掘だより 2012」(公財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所から転載)

研究室から

日本語学

東アジア言語文化コース教授

小助川 貞次

日本語学演習室は、この四月に旧日本語文化演習室から同じ階の旧フランス言語文化演習室に移転しました(日本文学はそのままだ)。旧日本語文化演習室に、フランス言語文化は四階の旧比較文化演習室に移転)。日本語学を専攻する学生は日本文学と同様に例年多く在籍し、旧日本語文化演習室では二つの教育研究分野の学生を収容しきれなくなったためです。新しい日本語学演習室は以前よりも少しだけ狭くなりましたが、書架が十分に使えることや学生が一日中ワークスペースとして使えることはとても有難いことです。

現在、方言学・社会言語学を専門とする中井精一教授と日本語史・漢文訓読史を専門とする小助川貞次の二人が、国内はもとより海外にも積極的に出かけ、それぞれの研究テーマを進展させながら学生・院生の指導をしています。二人ともここ数年、国内学会でシンポジウムやワークショップの企画担当をしたり、海外のシンポジウムで発表したり、さらに海外から研究者を招いて国際シンポジウ

ムを主催したりと、第一線で活躍する研究者と交流する機会が急増し、そのことは学生・院生の視野を大きく広げることに繋がっており、教育的成果をもたらしています。

また日本語学には日本人学生だけでなく、中国やベトナムからの交換留学生・研究生・大学院生も多く在籍し、演習室が国際的環境に包まれていることも大きな特徴です。そのため卒業・修了後に海外で活躍する日本人学生が出てきていることは、教員として大変嬉しいことです。言語学や他の外国語学とは異なり、外国語と縁が無い専門分野などと言われていることは遠い過去の話です。地域社会での調査や古文書の解読を通して培われた能力を、留学生との交流活動によって国際社会でも通用する力として成長させていくように毎日努力研鑽しています。



朝乃山に学ぶ「鍛錬」の大切さ

船木 悠 平 (61回哲学)



『横綱になるという夢』を叶える。富山商業高校時代の相撲部監督で、一月にがんで亡くなった浦山英樹さんとの固い絆が、朝乃山を支えている。

「千日の稽古をもって鍛とし、万日の稽古をもって錬とす」。剣豪・宮本武蔵が『五輪書』で記し「鍛錬」の語源となったとも言われる一文だ。計算してみると「鍛」は約三年、「錬」は約三十年。志を忘れずに精進し続けることが、物事を極めるのにつながることを説いている。

目標からぶれずに努力し続けることの大切さを学んだ。二月の大相撲春場所で、朝乃山(二十三歳)＝本名石橋広暉、富山市呉羽町出身＝が県出身の関取として約二十年ぶりに十両デビューし、あと一歩で優勝というところまで白星を重ねた。稽古場では汗が滴るほど四股を踏み、ぶつかり稽古では泥まみれになりながらも稽古を止めることはなかった。「恩師に誓った

呉羽小学校時代に相撲を始め、朝乃山。呉羽中学校でも競技を続けたが、けがもあり高校では辞めるつもりでいたという。それでも、浦山さんに熱烈なおファーを受けて続けることを決め、右四つ左上手の相撲スタイルを身に付けた。

春場所では中盤で連敗しながらも、自分のスタイルを貫いて終盤で五連勝。恩師との誓いを心に刻み、日々の取組に臨んでいたのだろう。

自分の学生時代を振り返って見ると正直、何かに打ち込めた自信はない。「さまざまな分野を相互に学ぶ『学際的な研究』ができる」との言葉に惹かれて受験した人文学部。哲学、歴史、文学、言語学など幅広く受講した。卒業後、地元の新聞社に就職し記者として働いている。

「地元を少しでも盛り上げた」との気持ちを支えた。

朝乃山には三本の化粧まわしがあり、うち一本は出世魚のブリが刺しゅうされている。ブリは大きくなるにつれて、コズクラ、フクラギ、ブリと名前が変わる。いつかは角界を代表する関取に成長してほしいとの思いが込められている。

横綱を目指す朝乃山の夢はま

平成二十八年年度 富山大学人文学部同窓会総会

平成二十八年七月九日 ボルファートとやま

議事では平成二十七年業務報告、決算報告が承認され、二十八年度事業が、原案どおり承認されました。役員人事では、新任理事に高野靖彦氏(28回院歴文化、藤井潤氏(64回英米、三石純也氏(64回哲学・人間)が承認されました。

議事終了後、大工原人文学部長より富山大学と人文学部の現状についてお話いただきました。

本来、大学教育は、我が国の一層の発展を担う教育・研究の場であり、当然のことながら理工系と共に人文系の人材育成をはかることが肝要と考えます。

学術研究懇談会(東大・早稲田など国立・私立など十一大学による)においても、「人文・社会科

だ道半ば。後輩の皆さんも、まだ成長する可能性を秘めたコズクラなのかもしれない。人文学部での学生生活を送る皆さんには明るい未来がきつとある。四年間は「鍛」の時期に当てるのに十分。何か打ち込むべき目標を見つけて、社会に飛び出した時にブリとして大成する日が来ることを願っている。

(高岡市在住)

学問のさらなる発展は、総合的な人間力を備えた人材を育成するにあり、人類社会が持続的発展するために喫緊の課題となっている」と提言されています。しかるに、一昨年、文部科学省は、理工系の人材育成を重視

し、文系を軽視するような通達を出して世の批判を浴びたところですが、富山大学でも人文学部への圧力は厳しいものがあります。富山大学では、人員の再配分により新学部設置と教養教育一元化を図る改革案が示され、人文学部の教員数および学生定員を大幅に削減する方針が示されました。こうした動向は、富山大学人文学部は県内でも唯一の人文系の学問を学ぶ場「知の拠点」であり、人文系の学問の多様性と教育の機会均等を維持する意味でも由々しき事態であると思います、と人文学部が置かれた苦境をお話になりました。

第五回 人文の集い

平成二十八年十月二十九日
人文学部第一講義室



講師は十二回史学卒業の青木澄夫中部大

学教授、演題は「富山からアフリカ・東南アジアへ」でした。

国際援助の仕事の具体的なエ

ピソード、現地政府との生々しいやりとり、スケールの大きな波乱万丈の歩みを参加者一同興味深く傾聴しました。講演終了後、昼食懇談会が開かれ、青木先生を囲み、お話を弾みました。

人文学部のあゆみ

第二回

―旧制富山高等学校初代校長 南日恒太郎―

富山大学准教授 入江 幸 二

県民の願いをうけて開学した旧制富山高等学校の初代校長となつたのは南日恒太郎である。

明治四（一八七二）年九月三十日（新暦十一月十二日）に今の富山市山室に生まれ、病のため進学は断念したものの独学を続けて、明治二十六年には国語科の中等教員検定試験に合格。富山尋常中学校に二年余り勤めたのち上京してさらに英語を学び、明治二十九年には英語科の中等教員検定試験に合格した。その後、東京の正則中学校で四年、京都の第三高等学校で二年英語を教え、明治三十五年から大正十年まで学習院教授として教鞭をとった（富山高等学校十年史 一九三三年）。

今では顧みられることも少ないが、学習院時代に南日が著した『英文解釈法』と『和文英訳法』は明治・大正期のベストセラーで、その後の受験参考書のヒントになったとされる（竹内

洋『立志・苦学・出世』講談社、二〇一五年 出来成訓『日本英語教育史考』東京法令出版、一九九四年）。また、先日筆者は

学習院アーカイブで学習院時代の時間割を閲覧することができたが、中等学科と高等学科を合わせて週十五、十八時間の授業を担当していた。旧制富山高等

学校長に就任した後でさえ週六時間の授業をしていたというから、実に豊かな知識と経験を持つ人物を富山は得たわけである。ヘルン文庫が富山にもたらさ

れるにあたって、「優秀な教師を集め、当地の文化の中心とするに相応しい蔵書であると判断した」（本学中央図書館「ヘルン文庫」HP）南日の尽力によ

るものであった。これについて早稲田大学名誉教授で美術史家・歌人でもあった會津八一の語るところによれば、ハーン

夫人は早稲田に蔵書を納めることも考えていたが、法政大学が八千円で入手したい旨打診していた。そこに南日が夫人のもとを訪れ、日本郵船の株券一万円分を担保として渡し、蔵書を引き取るようになったという（総合大学の図書館「會津八一全集」第六巻、中央公論社、一九六八年）。その後、馬場はるから資金を得ることができたため株券は南日に返されたが、三高時代の南日の年俸が八百円だったことを考えると、当時の一万円は年収の数倍に相当するだろう。南日が旧制富山高等学校の発展にどれほど心を砕いていたかをよく物語っている。

昭和三（一九二八）年七月二十日、開校式典を前にして南日は急逝した。その遺徳を偲ぶ銅像は人文学部棟前と馬場記念公園（富山市蓮町）に今も置かれている。



人文学部棟前の南日像。昭和四年製作のオリジナルは戦時中に供出されたため、昭和三十七年に現在の銅像が作られた。

華やかに

卒業祝賀会

平成二十九年三月二十三日
ホテル・グランテラス富山

人文学部同窓会は、富山大学卒業式・人文学部卒業証書授与

式の日に合わせ卒業祝賀会を開催しています。

当日は大工原学部長を始め先生方や同窓会



役員も出席し、会場は華やかに盛り上がりました。

例年祝賀会場では卒業生から新理事を募っており、林優菜さん（国際文化論）、田中冨香さん（中国言語文化）の二名が理事に立候補してくださいました。

平成二十八年度卒業生は学部生一八五名、大学院修了生五名で、人文学部の同窓会員は八六七九名となりました。

総会と人文の集いの講演の詳細、理事会記録についてはホームページをご覧ください。

新刊案内

人文学部ゆかりの方々の新刊を紹介します。

杉谷4号墳 第3次発掘調査報告書

富山大学人文学部考古学研究室編刊 2015年11月

キラリン光の旅

魚瀬ゆう子（25回国文）文 滑川市（事務局：滑川市子ども図書館） 2016年3月

食と農のアフリカ史 現代の基層に迫る

石川博樹・小松かおり・藤本武編 昭和堂 2016年3月

富山文学の黎明 1 漢文小説『蛭洲餘珠』（巻上）を読む

磯部祐子・森賀一恵著 桂書房 2016年3月

故郷は今も草芽吹き

高成玲子（25回英文）著 富山八雲会編 富山八雲会 2016年3月

高志国 海と山のこころ文化（日本海学研究叢書）

米原寛（14回史学）著 富山県観光・地域振興局地方創生推進室 2016年3月

伝統と現代が重なり合うまち 南砺市福野・井波・福光（地域社会の文化人類学的調査25）

藤本武、野澤豊一編著 富山大学人文学部文化人類学研究室 2016年3月

中国文化55のキーワード

武田雅哉・加部勇一郎・田村容子編著 齊藤大紀ほか執筆 ミネルヴァ書房 2016年4月

満川亀太郎 慷慨の志猶存す

福家崇洋著 ミネルヴァ書房 2016年4月

ルールリテラシー 共働のための技術

佐藤裕著 新曜社 2016年4月

人が助かることさえできれば 「戦争」と「テロ」の時代を見据えて

小澤浩著 白馬社 2016年6月

基礎から学ぶ音声学講義

加藤重広、安藤智子著 研究社 2016年8月

ロシアの歴史を知るための50章（エリア・スタディーズ ヒストリー152）

下斗米伸夫編著 中澤敦夫ほか著 明石書店刊 2016年11月

新日本言語地図 分布図で見渡す方言の世界

大西拓一郎編 中井精一ほか著 朝倉書店刊 2016年12月

富山文学の黎明 2 漢文小説『蛭洲餘珠』（巻下）を読む

磯部祐子・森賀一恵著 桂書房 2017年3月

平成29年度人文学部 総会のご案内

海外の観光客に人気の高い立山の「雪の大谷」は、会報をお届けするこの時期に15mを超える雪の壁が見られるとのこと。この夏、立山の雪を共に見ませんか。

さて本年度の総会を、下記の要領で開催いたしますので、多数の皆様のご参加をいただきたく、ご案内申し上げます。

人文学部同窓会長 米原 寛

日時 平成29年7月8日(土) 総会 午後1時30分～ 講演 講師 人文学部教授 中 井 精 一
講演 午後2時40分～ 演題 「ことばの広がりと変化をとらえる」
場所 ボルファートとやま(富山市奥田新町81 TEL 076-431-1113)

講演要旨

フィールドワークは楽しい。人を相手にする方言のフィールドワークは特に楽しい。その楽しさを知り、その楽しさを感じながらその土地の人々の暮らしや社会、文化やものの考え方を踏まえながら実証的なことばの研究をすること、これが他の言語研究の分野と私たちの「方言研究」との大きな違いと言えるのではないだろうか。

富山大学人文学部には、創設以来、都竹通年雄、川本栄一郎、齊藤孝磁といった日本を代表する研究者が在籍してきた。講演では、人文学部日本語学研究室が、これまで日本各地で実施してきた方言調査の成果をもとに、北陸富山県を中心としたことばの広がりや変化について考えてみたい。

懇親会：午後4時～ 会費：5,000円(当日受付でお納め下さい)

お知らせ

第六回人文の集い

講演…「インドに呼ばれて」
講師…河合隆(21回国文)
富山大学同窓会連合会長
期日…十月二十八日(土)
午前10時～11時30分
会場…富山大学人文学部一階
第一講義室
概要…混沌の中の経済成長、社会を貫くヒンドゥー教、ヒンドゥー世界に埋没した仏教。

終了後、十一時五十分より隣接の第二講義室で昼食会を開きます。講演は参加費無料、昼食会は会費二千円(学生五百円)で、どちらか一方だけの参加も可能です。

同封ハガキでお申し込み下さい。

同窓会連合会報告

平成二十八年度富山大学同窓会連合会総会が平成二十八年七月二十一日(木)に富山電気ビルで開催されました。総会では田代幹事長の司会で河合連合会長を議長として、二十七年事業、会計決算・監査報告等があり、二十八年度事業計画、会計予算案が審議承認されました。引き続き、役員一部交代に関し、四件の新役員紹介がありました。総会終了後、小泉昇氏(茶道師範)の記念講演「はじめての茶道」があり、続いて開催された懇親会にて会員相互の親交を深めました。総会並びに懇親会への参加者総数は七十七名でした。

平成二十八年度第九回ホームカミングデー報告

平成二十八年十月十五日(土)、富山大学高岡キャンパスにて芸術文化学部担当により、同学部一期卒業生・上田楠菜子氏のヴァイタリティと若さあふれる講演「導火線を持つて突き進め!」富山市役所デザイン採用職員奮闘記」があり、終了後、折から開催中の大学祭の賑やかな雰囲気の中で学内施設見学と懇親会がおこなわれました。

富山大学同窓会連合会十周年記念事業の開催について

富山大学の各同窓会がまとまり富山大学同窓会連合会が設立され大学とともに活動を始めてから十年になります。そこで左記の事業を行うことになりました。会員の皆様もふるってご参加ください。

期日…七月二十二日(土)

記念講演…「日本文化の未来」

期日…七月二十二日(土)

講師…中西進高志の国文学館長

会場…富山大学黒田講堂

時刻…午後二時～三時

入場無料、会員以外の方も聴講できます。

総会…富山電気ビルにて

四時～四時三十分(会員のみ)

祝賀会…富山電気ビルにて

五時から(来賓および会員)

祝賀会参加費一万円

(詳細は同窓会連合会ホームページに掲載します。)

期日…七月二十二日(土)

人文学部教員異動

退職 (平成29年3月)

○村井文夫 (フランス言語文化)

○鄧 芳

(外国語教育専任教員・中国語)

採用

○南 祐三准教授 (西洋史)

(平成29年2月1日)

○梅澤 礼准教授

(フランス言語文化)

(平成29年4月1日)

一 報

謹んでご冥福をお祈り致します。

矢後まゆみ (1回史学)

平成27年3月20日

千石 幸子 (9回英文)

平成27年12月2日

山崎 伸一 (19回国文)

平成28年5月4日

年会費の報告

年会費納入状況をお知らせ致します。平成28年6月～平成29年3月まで、285名(終身会費14名・年会費271名)の方々から408,000円の年会費を納入いただきました。ご支援、ご協力を厚く御礼申し上げます。

編集委員

田中 史子 谷口 恵子
成瀬裕美子 山藤 登
山本 孝一 畠山 節子